



故郷の空 No.22

きりがみの作品を作り始めて、二十五年あまりが経った。その数も、ここに掲載したものを含めて、三百点程になるだろう。その中で、一番多い図柄は、バス停と駅である。故郷をテーマにしたものがほとんどなので、おのずとそうなってしまうのかもしれない。

バス停や駅は、旅の入り口である。ボクの場合、まず近くの「伊予・大洲駅」にバスで出て、そこから本格的な旅が始まった。学校に上がる前後の頃は、バスそのものが旅であった。その後、受験で東京に来たのが、それまでの一番遠い一人旅だった。それから後は、もつと遠い外国にも出かけるようになる。

現在ボクはロンドンに滞在している。そこで思うことは、旅の途中がどんなに長くても、一番印象に残っているのは、その始まりである。旅を振り返るのも、入り口からだ。

旅は郷愁を誘うものだが、故郷を図柄にする時、バス停と駅が多かったというのも、ボクはその作業の中で、故郷の確認をしていたからかもしれない。

(彫刻家)

むらかみ・たもつ モダンアート協会会員。一九五〇年、大洲市生まれ。東京都杉並区在住。東京学芸大学卒。モダンアート展（新人賞、部門賞、協会賞）。文化庁現代美術演技展。新潟市野外彫刻大賞展。KAJIMA彫刻コンクール作品展（銀賞）。個展はか。山形・蔵王高原・三重県・尾鷲市・東京・神田などに彫刻作品設置。文化庁派遣芸術家として英国・ロンドンに滞在中。

旅の入り口

村上 保

Tamotsu Murakami